

ワークショップ 13

「レーザー内視鏡診療の現状と近未来」

司会 中村 哲也（獨協医科大学医療情報センター）

磯本 一（鳥取大学医学部機能病態内科学）

消化管領域で内視鏡システムの光源にレーザーを用いた内視鏡システムが実臨床で汎用されている。BLI (Blue laser imaging) の拡大観察における視認性が改良され、表在癌の微細血管や表面構造による質的・量的診断能の向上に寄与している。新たな画像強調法として開発された LCI (Linked color imaging) は、消化管腫瘍の拾い上げ、*H. pylori* 胃炎に伴う腸上皮化生の評価や炎症性腸疾患の病勢診断など多岐な用途がある。PDD (photodynamic diagnosis) が同時方式、原色フィルターの内視鏡（レーザー内視鏡も含む）で可能になることが判明し、特に早期胃癌の客観的診断法として期待される。また、約 1000 倍まで拡大可能な共焦点レーザー顕微内視鏡観察の消化管腫瘍診断における有用性が報告されている。治療面では、医師主導治験によりタラポルフィンナトリウムと半導体レーザー赤色光による PDT (photodynamic therapy) が食道癌に対する化学放射線治療／放射線治療後の遺残・再発性病変に有効であることが証明され、2015 年の保険収載以降症例が蓄積されており、早期胃癌への適応拡大も注目される。レーザー光による腫瘍特定の代謝産物を可視化する先駆的な分子イメージング法や近赤外レーザー光による光免疫療法に関する基礎研究等の演題も広く募集したい。